

鳥取の森のようちえんにおける音楽表現活動

-環境に着目して-

今度 真優子*・鈴木 慎一郎*

A Case Study on Music Expression Activities in Forest Preschool in Tottori : Focusing on Environment

IMADO Mayuko*・SUZUKI Shinichiro*

キーワード：森の幼稚園，鳥取，音楽表現活動，環境，観察調査

Key Words: Forest Preschool, Tottori, Music Expression, Environment, Observations

1. はじめに

『幼稚園教育要領』の領域「環境」のなかで「幼児期において自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるように工夫すること」と述べられている¹。ここから、幼児期の自然との出会いは、表現力の基礎を形成する重要な役割をもっていることがわかる。

近年、このような幼児期の自然との出会いを大切にした森のようちえんが全国に広まりつつある。森のようちえんとは、森のようちえん全国ネットワークによると、「自然体験活動を基軸にした子育て・保育、乳児・幼少期教育の総称」と定義づけられている²。北欧諸国で始まった森のようちえんは、日本全国に広まり、鳥取県は人口が少ないにもかかわらず、11園もの森のようちえんが存在している。

しかし、園舎を持たず、保育活動のほとんどを自然の中で行う森のようちえんでは、園舎を持つ通常の保育現場での歌唱活動で用いられているピアノやCD等の機器はないと考えられる。このような環境の中で、子どもと歌唱活動や音楽を伴う身体表現活動等はどのように行われているのかに疑問を持った。

今村ら(2011)が、森のようちえんにおいては、歌唱などの表現活動に自然の題材が積極的に取り入れられていると述べているように³、森のようちえんでは、自然にまつわる歌や手遊びが行われていたり、自然物を楽器として用いて音楽表現を行ったりしていると考えられる。また、新幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の取扱いでは、新たに「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色などの自然の中にある音、形、色などに気づくようにすること」と身近な環境音に耳を傾けることの重要性がうたわれており⁴、身近に風や雨、草や花などに触れる機会のある森のようちえんでは、豊かな感性を養うために重要とされる環境音に恵まれているのではないかと考えられる。

* 鳥取大学地域学部

よって、本稿の目的は、鳥取県内の森のようちえんへの質問紙調査と観察調査を通して、森のようちえんならではの音楽表現活動の実態を明らかにすることである。具体的には、森のようちえんにおける音楽表現活動の実態について、歌唱・音楽を伴う身体表現活動、楽器、音環境の3点に着目しながら、明らかにすることとする。第一に、鳥取県内の森のようちえんを対象とした音楽表現活動に関する質問紙調査を実施する。第二に、質問紙調査を行った園の中から1園を対象としてどのような音楽表現活動が見られるのか観察調査を行う。

II. 鳥取県内の森のようちえんへの音楽表現活動についての質問紙調査

1. 目的

本調査は、鳥取県内の森のようちえんにおいて、どのような音楽表現活動が行われているのかを、質問紙調査によって明らかにすることである。

2. 方法

(1) 日時

2017年（平成29）年9月から10月にかけて実施した。

(2) 対象

鳥取県内の森のようちえん11園（東部7園，中部2園，西部2園）である（表1）。

表1 鳥取県内の森のようちえん一覧（2017年5月1日現在）

地域	活動場所	園の名称	森のようちえん全国ネットワーク団体会員	とっとり森・里山等自然保育認証園
東部	智頭町	森のようちえん まるとんぼう	○	○
		空の下ひろば すきぼっくり		○
	八頭町	やずの里山ようちえん	○	
	鳥取市	いきいき成器保育園		○
		鳥取・森のようちえん・風りんりん	○	○
		鳥取・森のおさんぽ会トコトコ	○	
		空山ぼくじょう ぱっか	○	○
中部	倉吉市	自然がっこう 旅をする木		○
		とっとり中部あおぞら自主保育の会 木とねっこ	○	
西部	米子市	NPO法人親子支援hughughughug 大山森のようちえん	○	
		森のようちえん michikusa		○

(3) 手続き

質問紙を鳥取県内の全森のようちえんに郵送し、職員の方に回答してもらい、その後返信用封筒で返信してもらう。質問項目としては、保育者が設けている歌唱活動や音を伴う身体表現活動について、既製の楽器や自然物を用いた楽器の使用について、森のようちえんならではの環境音についての大きく分けて3つを問うた。調査の結果、11園中5園から回答を得た。回収率は45%であった。

(4) 倫理的配慮事項

質問紙の記載事項および集計結果については本研究の目的以外には使用しないこと、また調査結果は統計的に処理されるため園は特定されないことについて説明し、調査実施の承諾を得た。

3. 結果及び考察

図1は、保育者が保育の中で時間を設けて、子どもたちと歌を歌うことがあるかについて質問した結果をまとめたものである。

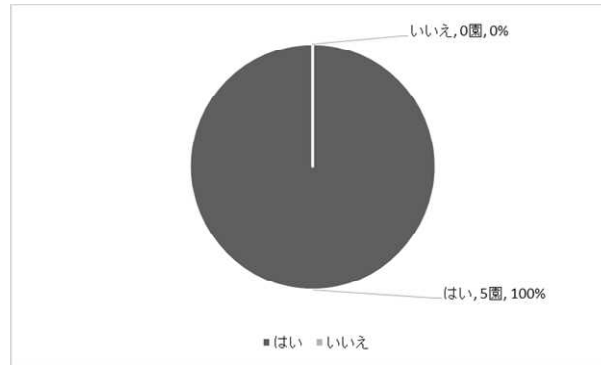


図1 保育の中で時間を設けて、子どもたちと歌を歌うことはあるか

図1より、時間を設けて歌唱活動を行うかについて、「はい」が5園、「いいえ」が0園という結果となっている。ここから、子どもの自由度が高く、ほとんどの保育時間を自由遊びの時間としている森のようちえんでも、保育者が時間を設けて歌を歌う活動を設けているということがわかる。

次の図2は、上の質問において歌を歌うことがあると回答したすべての園で、1週間を通して何日程度行っているかについて質問した結果である。

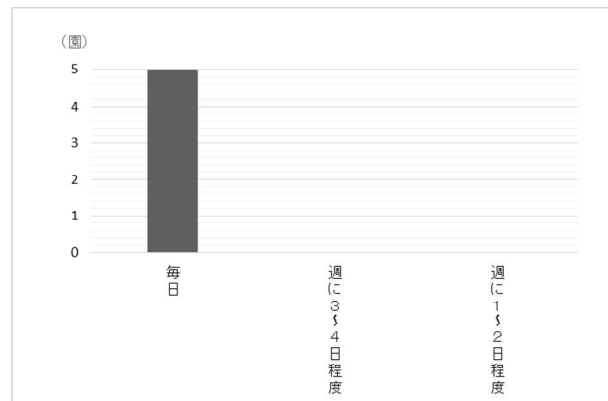


図2 1週間のうちどれくらいの頻度で設けているか

図2より、歌唱活動を行う1週間の頻度について、「毎日」が5園、「週に3〜4日」が0園、「週に1〜2日」が0園という結果となっている。ここから、森のようちえんにおいても、1週間の保育のなかで毎日、歌を歌う活動を設けていることがわかる。これは、森のようちえんとは取り巻く環境も形態も異なる、園舎をもつ幼稚園や保育園とも変わらない頻度で行われていると考えられる。

次の図3は1日の保育時間のなかでいつ歌を歌う時間を設けているのかについて質問した結果である。

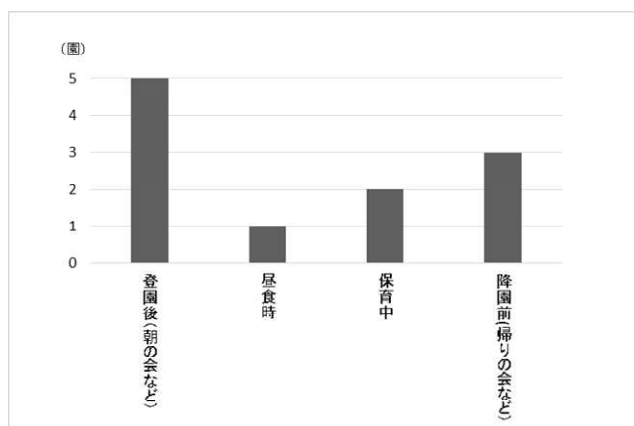


図3 保育時間のなかで、いつ歌を歌う時間を設けているか（複数回答可）

図3では、1日の中で歌を歌う時間について「登園後」が5園、「降園前」が3園、「保育中」が2園、「昼食時」が1園という回答となっている。1週間を通して毎日歌を歌う時間を設けているなかでも、1日のどの時間に設けているかについては、ばらつきが見られる。登園後に取り入れているのは、5園共通しており、これは登園後の園児が最初に全員で顔を合わせる朝の会等で、歌を取り入れているからと考えられる。昼食時に1園取り入れていたのは、《おべんとう》⁵など昼食への導入に歌を用いているからと考えられる。保育中の歌については、質問紙では把握しきれなかったため、観察調査での課題としたい。また登園前の次に多かった降園前についても、一般的な幼稚園では、《さよならのうた》⁶を歌って降園することが多いが、森のようちえんでもそのような歌を取り入れているのか、それともまったく別の歌を歌っているのか、観察調査を通して明らかにしていきたい。

次の図4は、歌を歌う活動をする際、歌の伴奏には楽器を用いているのか質問したものである。

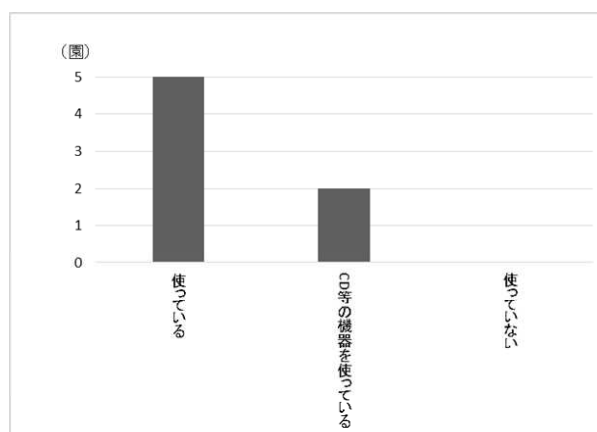


図4 歌の伴奏には楽器を使っているか

図4より、歌を歌う活動をする際の伴奏に楽器を使っているかについては、「使っている」が5園、「CD等機器を使っている」が2園、「使っていない」が0園という回答となっている。園舎のない屋外での保育が中心となるため、通常の幼稚園・保育園等と違い、歌唱活動の伴奏に用いられるピアノ等の楽器や、CD機器が十分でないと考えられる森のようちえんでも、歌唱活動に楽器やCD等の機器が使われていることが明らかになった。子どもと歌唱活動を行う上で、楽し

く歌ったり、正しい音程やメロディーで歌ったりするためには、どんな環境であれ楽器等が必要なのだと考えられる。

次の図5は、歌の伴奏に楽器を「使っている」と答えた園では、具体的にどのような楽器を用いているのかについて質問した結果である。

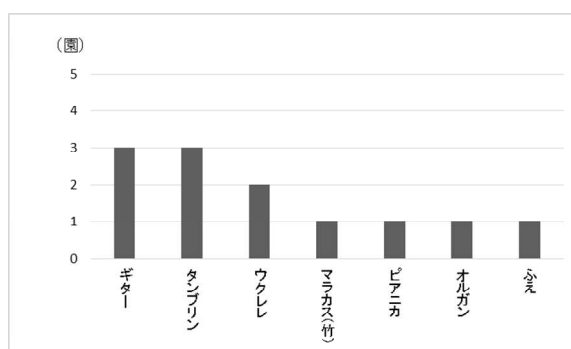


図5 使っていると答えた園では、どのような楽器を使っているか

図5より、歌唱活動に用いる楽器については、「ギター」が3園、「タンブリン」が3園、「ウクレレ」が2園、「マラカス」が1園、「ピアニカ」が1園、「オルガン」が1園、「ふえ」が1園という回答となっている。歌唱活動に通常用いられる楽器としてまず挙げられるのはピアノであるが、森のようちえんの場合、屋外での保育が中心となるため、持ち運びができないピアノではなく、持ち運びのしやすい楽器が多く用いられている傾向が見られる。中でも、子どもたちの歌に合わせての伴奏がしやすいギターやウクレレを用いていることが一つの特徴として見られる。数としては少ないが、ピアニカやオルガンを用いている園も見られる。また、歌唱の装飾音やリズムに合わせて鳴らす楽器として、タンブリン、マラカスが用いられていると考えられる。伴奏がピアノに限られないことで、多様な楽器に触れ、さまざまな音を楽しみながら歌唱活動を行っていると考えられる。具体的に保育者や子どもが歌唱活動においてどのように楽器を用いているかについては、観察調査で明らかにしていきたい。

次の図6は、保育のなかで、保育者が子どもと一緒に森のようちえんの環境音に耳を傾けることがあるかについて質問した結果である。

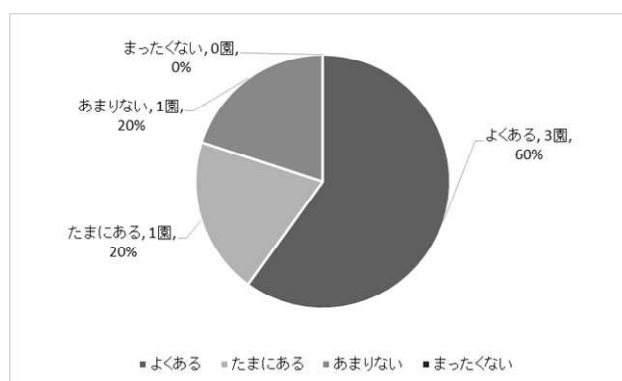


図6 子どもと一緒に森のようちえんの環境音に耳を傾けることがあるか

図6より、環境音に耳を傾けることがあるかについては、「よくある」が3園、「たまにある」が1園、「あまりない」が1園、「まったくない」が0園という回答となっている。毎日の保育のフィールドが、森や里山、川などの豊かな自然の中である森のようちえんでは、豊かな環境音が

存在していることが考えられる。そのなかで、環境音にほとんどの園が意識して耳を傾けたことがあるということが明らかになった。

さらに、保育者が森のようちえんならではだと感じる環境音の具体例についても質問した結果、以下のものが挙げられた (表2)。

表2 森のようちえんならではだと感じる環境音

自然環境	動物・虫
<ul style="list-style-type: none"> ・川の音 (4園) ・風の音 (4園) ・葉のすれる音 (3園) ・雨の音 (1園) ・枝がゆれる音 (1園) 	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥の鳴き声 (5園) ・虫の鳴き声 (4園) ・馬のひづめ (1園)

次の図7は、自然物を取り入れて音楽表現活動を行ったことがあるかについて質問した結果である。

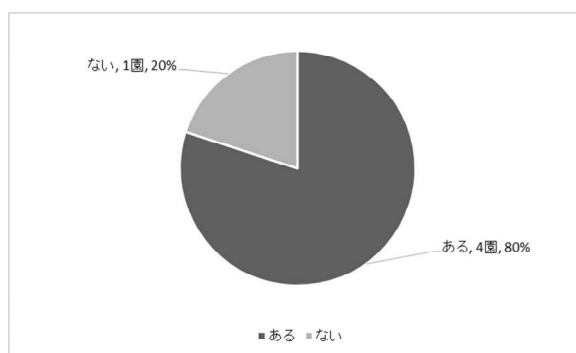


図7 自然物を取り入れて音楽表現活動を行ったことがあるか

図7より、自然物を取り入れて音楽表現活動を行ったことがあるかについては、「ある」が4園、「ない」が1園という回答となっている。自然の中での保育であるので、人工物や既製の楽器以上に自然物に日常的に触れる機会があるためか、ほとんどの園で自然物を取り入れた音楽表現活動を行っていることがわかった。また、自然物を取り入れた音楽表現活動についての具体的内容についても質問すると、以下のものが挙げられていた (表3)。

表3 自然物を取り入れた音楽表現活動

<p>◆手作り楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イタドリやツバキなどの葉で笛を作る ・竹でマラカスを作る <p>◆自然物を用いた音遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木や竹、石を叩いてリズムをとる ・木の枝を太鼓のバチに見立てさまざまな自然物を叩く ・草の葉を手でたたいて鳴らす ・石を合わせて音を出す ・木の枝などを振り回して音を出す
--

次の図8は、子どもたちが自然とかかわるなかで、自発的に歌を歌ったり、踊ったりする姿が

見られるかについて質問した結果である。

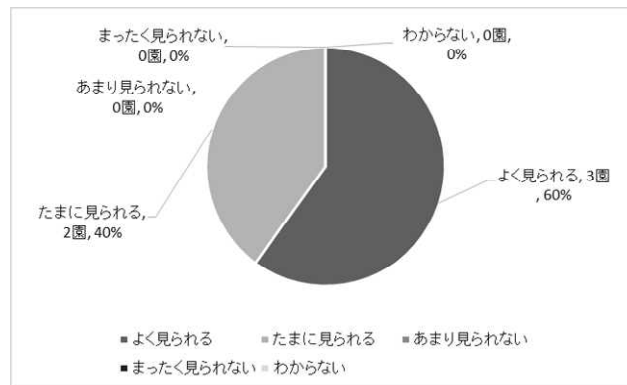


図8 子どもたちが自然とかかわるなかで、自発的に歌を歌ったり、踊ったりする姿が見られることがあるか

図8より、子どもたちが自然とかかわるなかで、自発的に歌を歌ったり、踊ったりする姿が見られるかについては、「よく見られる」が3園、「たまに見られる」が2園、「あまり見られない」が0園、「まったく見られない」が0園という回答となっている。日常的に自然とかかわるなかで、保育者が時間を設けなくても、ほとんどの園で子どもたちの自発的な表現活動を見ることができると明らかになった。これに関しては、観察調査で実際の保育の様子を観察しながら、より詳しく検討していきたい。

鳥取県の森のようちえんへの質問紙調査を行い、回答を得た5園の現状から明らかになったことをここでまとめる。

まず、歌唱活動及び音楽を伴う身体表現活動については、歌唱活動についてはすべての園が1週間のうち毎日、音楽に合わせて体を動かす活動については、ほとんどの園が1週間のうち3～4日程度は設けていることが明らかになった。このような1週間のうちの頻度について見れば、森のようちえんではない、園舎をもつ幼稚園や保育園などと比べても、ほとんど変わらない頻度で設けられていると考えられる。設けている時間については、ほとんどが登園後の朝の会や、降園前の帰りの会等になっており、保育中に設定保育として行うということではなく、自由度の高い保育のなかで唯一全員が顔を合わせる時間の中で、取り入れていることがわかった。また、その他にも保育中に子どもが自然とかかわるなかで、自然と歌を口ずさんだり、踊ったりする子どもの姿も多く園で見られており、豊かな自然環境が自発的な子どもの表現活動を引き出していることも考えられる。

次に、音楽表現活動に用いている楽器については、園舎がない屋外のフィールドでの保育ということで、一般的に伴奏に使われるピアノは使われず、持ち運びがしやすく、屋外でも使いやすい、ギターやウクレレ、タンブリンなどの楽器が多く使われていることが明らかになった。また、森のようちえんでは、既製の楽器だけでなく、自然物を用いたオリジナルの楽器をも表現活動に用いていることが明らかになった。草を使って草笛を作ったり、竹を切って竹マラカスを作ったり、楽器として形作らなくても、木や竹や石を打ち合わせてリズムをとるなどの、自然物を楽器と見立てた豊かな表現活動が見られることが明らかになった。

最後に、音環境については、ほとんどの園が意識して保育中耳を傾けることがあるということがわかった。森のようちえんならではの環境音としては雨や風、川や木などからなる自然環境音や、鳥や虫、馬などの動物の鳴き声が存在していることも明らかになった。森ようちえんでは、

日常的に園舎という限られた空間では耳にすることのできない、多様な音に触れる機会が日常的に存在していると考えられる。

ここから、次章では、本章の質問紙調査によって明らかになったと鳥取県内の森のようちえんの音楽表現活動の実際を踏まえ、回答を得た園の中から対象を1園に絞り、観察調査を行う。それにより、保育者が行う歌唱活動等の実際の様子、楽器、フィールドを取り巻く音環境について検証していくこととする。

Ⅲ. 鳥取県内の森のようちえんへの音楽表現活動の観察調査

1. 目的と方法

本調査は、鳥取県内の森のようちえんにおいて、どのような音楽表現活動が実際に行われているのか、その実態を明らかにすることである。

事前の質問紙調査で回答を得た園の中の1園に依頼し、実際の保育の様子を観察する。

(1) 日時・場所

【第1回】2017(平成29)年11月30日(木) ・ 鳥取砂丘 柳茶屋キャンプ場

【第2回】2017(平成29)年12月8日(金) ・ 森林公園 とっとり出合いの森

(2) 対象

森のようちえん 風りんりん

(3) 倫理的配慮事項

観察調査にて、記録した子どもの個人情報については守秘義務を遵守し、本研究以外の目的では使用しないこと、本研究に掲載する際には個人名を伏せることについて園側に説明し、調査実施の協力を得た。

2. 第1回の結果と考察

第1回の森のようちえん風りんりんにおける観察調査について以下に考察する。

(1) 調査の概要

【対象園】森のようちえん 風りんりん

【日時】2017(平成29)年11月30日(木)

【場所】鳥取砂丘 柳茶屋キャンプ場

【人数】子ども16人 保育者3人, 視察者4人

【天気】雨

【1日の流れ】

9:00 集合

10:00 フィールド(鳥取砂丘柳茶屋キャンプ場)到着

10:20 朝の会

10:40 クッキング

完成次第昼食

14:10 フィールド出発

14:30 お迎え, 解散

(2) 歌唱活動・音楽を伴う身体表現活動について

歌唱活動・歌を伴う身体表現活動は、主に朝の会において見られた。朝の会の詳しい流れについては以下の表4に示す。

表4 朝の会の流れ

時間	保育者	子ども
10:05	<ul style="list-style-type: none"> 子どもがバスを降り、荷物を自らで運んでいく様子を見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの荷物や、活動に必要な荷物も協力して運ぶ。 活動場所へ向かう途中、それぞれが持っている手づくり楽器をカバンから出し、鳴らしたり互いの物を見合ったりする。
10:20	<ul style="list-style-type: none"> 保育者が《雪》の伴奏をギターで弾き始める。 集まってきた子どもたちと一緒に歌う。 全員が活動場所にそろったのを確認したところで、ギターで伴奏をしながら《風りんりんのうた》を歌い始める。 さあさあみんな あつまって 風りんりんが はじまるよ さあさあみんな わになって きょうも げんき みんなでおへんじ はいはいはい さあさあみんな あつまって 風りんりんが はじまるよ さあさあみんな わになって 風りんりんを はじめよう (《ミッキーマウス・マーチ》のメロディー) 1人の保育者はギター伴奏と歌を歌っており、他の保育者はリズムに合わせて枝を板に打ったり、手づくり楽器を鳴らしたりしている。 手遊び《めのまどあけろ》をする めのまどあけろ おひさままってるぞ みみのまどをあけろ だれかがうたってる はなのまどをあけろ おみおつけいいにおい くちのまどをあけて おはよう 「まーるくなーれ、まーるくなーれ、1、2の3♪」と歌いながら輪になる。 ギターの伴奏で「○○ちゃん、○○くん、○○くん、お返事聞きたいな♪」と歌う。3人ずつ名前を呼び、保育者含め全員の名前を呼び終わるまで続ける。 立ち上がり、ギターの伴奏に合わせて《アブラハムのこ》を歌いながら、歌詞に合わせて全身を動かして踊る。 アブラハムには 7人の子 1人はのっぽで あとはちび みんな仲良く暮らしてる さあ 踊りましょう 右手(動かす) 	<ul style="list-style-type: none"> ギターの音色が聞こえると数人の子どもたちが集まり、《雪》を歌い始める。 自然物や持ち物を振り回して好きなことをしている子どもも多い。 歌に合わせて、それぞれが持っている手づくり楽器(竹マラカス、貝マラカス)や、木の枝や板、石、貝殻を打ち鳴らし、演奏する。持っていない子どもは手拍子をしながらかう。 保育者と同様に歌いながら輪になる。 名前を呼ばれた子どもが「は〜い♪」と返事をする。 「次は○○ちゃんと○○くんだよ」と全員に呼び掛ける子どももいる。 保育者、見学者、子どもなど年齢関係なく混ざり合っ、楽しく触れ合いながら歌って踊る活動を楽しんでいる。

	<p>左手（動かす） ○○ （1， 2， 3 番になるごとに， 動かす場所が 1 つずつ増えていく） ・子どもの「次は○○がいい」という声を拾 って， 次に動かす場所を決めて歌っていた。</p>	<p>・「次は髪がいい」「次はおへそがいい」 など本来歌詞にはないが， 次に動かした い場所を言う姿が多くみられる。</p>
--	--	--

朝の会は，季節のうたとして《雪》⁷を歌うことから始まり，オリジナルの《風りんりんのうた》を歌い，歌にのって名前を呼び，音楽に合わせて体を動かすというような流れで，随所に歌唱活動・音楽を伴う身体表現活動が盛り込まれていた。保育者が曲名を言うことはなく，保育士がギターを取り出し，曲の伴奏を弾き始めることで自然と子どもたちが集まってきて，保育者の歌いだしとともに子どもたちも歌いだすという流れがあった。子どもたちの中で習慣として，ギターが始まれば歌が始まるという意識があり，保育者に集まろうと言われなくても，自ら自然と輪になって集まっている様子が印象的であった。歌唱活動も，音楽を伴う身体表現活動も，異年齢関わりあいながら，保育者も，初めて出会う視察者をも巻き込んで，一緒になって楽しむ姿が見られた。このように朝の会において，異年齢混ざり合った環境で，伸び伸びと歌を歌ったり，体を動かしたり，オリジナルの楽器も合わせて鳴らしたりする様子は森のようちえんならではの豊かな音楽表現となっていた。

また，一般的な園では，歌唱活動や音楽を伴う身体表現活動の際には，子どもの歌が多く収録されている音源をCDで流すことも多いが，そういった方法は見られなかった。屋外でCDプレーヤーを取り扱うことは困難であるし，子どもたちのペースやリクエストに応えながら，目の前の子どもたちに合わせて自由に伴奏を調節できるギターが使用しやすいのだと考えられる。

(3) 楽器について

屋外での朝の会となるので，使う楽器は限られると予測していたが，ほとんどの歌で伴奏に使っていたギターに限らず，子どもたちの手づくり楽器，貝や木などの自然物をも自由に鳴らしていたことで，既製の楽器での音楽表現とはまた違った独特で豊かな音楽表現が生まれていた。自然物を用いた楽器では，メロディーを奏でるということは難しいため，リズムに合わせて自由に鳴らすことができ，子どもにとっても縛られることのない自由で楽しい表現活動になっていたのだと考えられる。

朝の会において，子どもそれぞれが持っていた手づくり楽器についても考察したい。手づくり楽器としては，竹マラカス，貝マラカスが見られた。

竹マラカス（図9）は，ものづくりの日に子どもたちが手づくりしたものである。切った竹に，木の実や石などの自然物や，ビーズ等思い思いのものを入れている。布やテープで装飾もしており，気に入ったものを普段の保育に持ってきており，保育中にもよく振って鳴る音を楽しんでいる。



図9 子どもたちが使っていた竹マラカス

貝マラカスは、鳥取県岩美町の浦富海岸で拾ったという、子どもの手のひらくらいの大きなサイズの貝の中に、砂や石、小さな貝等を入れて重ね合わせ、作ったマラカスである。

(4) 音環境について

風りんりんは、毎週木曜日をクッキングの日としており、今回の視察も木曜日だったため、独特の音環境を感じることができた。保育者は何も手を出さず、火おこしから、釜での炊飯、味噌汁づくりまですべて子どもたちで一通り行った。その中で、特に子どもには危ないと遠ざけられがちな火おこしも、子どもたちだけで協力して行なうなかで、火が起こり聞こえてくるパチパチパチという音や、うちわで火を仰いで起こるボワーッという音は、制限されていけば聞くことのできない環境音であると考えられる。また、屋外のキャンプ場の炊事場での活動であったので、より身近に雨の音、風で木々がざわめく音も身近に感じられた。

このように、クッキングの日という日を取り上げても、多様な環境音が存在しているということがわかったが、子どもたちは自分たちの食事を作ることに夢中で、耳を傾けるほどの余裕はない様子であった。そのため、子どもたちが環境音に気づいて擬音語で表現するというような様子を見ることはできなかった。

3. 第2回の結果と考察

第2回の森のようちえん風りんりんにおける観察調査について以下で考察する。

(1) 調査の概要

【対象園】森のようちえん 風りんりん

【日時】2017（平成29）年12月8日（金）

【場所】森林公園 とっとり出合いの森

【人数】子ども16名、保育者3名、視察者2名

【天気】曇り時々雨や雪

【1日の流れ】

9:00 集合

9:30 フィールドへ移動

9:50 フィールド（森林公園とっとり出合いの森）到着

10:05 朝の会

10:20 芝生で自由遊び

11:00 森の探検

12:20 雷雨のため、管理棟・展示館へ避難

13:00 昼食

13:20 雷雨のため、管理棟・展示館での自由遊び

13:50 帰りの会

14:15 フィールド出発

14:30 お迎え、解散

(2) 歌唱活動・音楽を伴う身体表現活動について

朝の会の詳しい流れについては以下の表5に示す。

表5 朝の会の流れ

時間	保育者	子ども
10:05	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者がギターを弾き始める。《雪》の伴奏を繰り返し、子どもが10人ほど集まったところで歌い始める。 ・他の保育者が持っていたタンブリンを子どもに渡す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ギターを聞いた子どもが集まってくる。
10:10	<ul style="list-style-type: none"> ・ギターで伴奏しながら《風りんりんのうた》を歌う。(歌詞は第1回の視察記録参照) ・「まーるくなーれ、まーるくなーれ、1, 2の3♪」とギターで弾きながら歌う。 ・子どもの「めのまどあけろ いっせーのーで」という声を聞いて、手遊び《めのまどあけろ》を始める。 ・子どもと一緒に「おはようございまーす」と言う。 ・ギターで伴奏を弾きながら「〇〇くん、〇〇くんお返事聞きたいな〜♪」と歌う。保育者含め、全員の名前を呼び終わるまで続ける。 ・朝の会を終わるとい声掛けはなく、子どもの「〇〇して遊びたい」とい声を拾いながら、次の活動場所を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タンブリンをリズムに合わせて、鳴らしながら歌う。今日は子どもが持つ楽器はタンバリン1つのみだったため友だちと交互に貸し合っていた。 ・集まっていない友だちに対して「みんなーあさのかいするよー」と呼びかける子どももいる(保育者は呼び掛けない)。 ・手拍子をしながら歌う。タンブリンを持っている子どもは鳴らしながら歌う。 ・ちいさなマラカスを取り出し、鳴らす保育者もいる。 ・保育者と一緒に集まるまで何度も繰り返す。 ・通りかかった、出会いの森職員にハイタッチをする子どもが多いなかで、「つづきするよー」と次に進めたい様子の子もいる。 ・「めのまどあけろ いっせーのーで」と言い出す ・「じゃんじゃかじゃんじゃん」と楽しくなって歌って踊る姿も見られる。 ・「おはようございまーす」と口々に言う。 ・「〇〇くん、輪になって」という子ども、タンブリンを自由に鳴らす子ども、座って待っている子どももいて、自由度が高い。 ・名前を呼ばれたら元気よく返事をする。

概ね前回の視察と同様の流れで朝の会は進められていた。しかし今回は、子どもの手づくり楽器は見られず、タンブリン1つと保育者が持っていた小さいマラカスに限られていた。楽器が限られているなかでも、歌は手拍子をしながら元気よく歌う姿が多く見られた。楽しくなって自由に歌を口ずさんで体を動かしている子どもの姿も見られた。

朝の会以外の全体での歌唱活動はほとんど見られなかったが、昼食時には、「ありがとう ありがとう 自然の恵みにありがとう♪」と歌ってからいただきますをして昼食へ移っていた。通常の園生活で歌われているような《おべんとう》は歌われておらず、オリジナルの歌を歌い、子どもたちが自然の恵みに感謝して命を頂くありがたさを感じられるようにしていた。また、降園時の帰りの会で、絵本を見て、帰る直前に全員で輪になってわらべうた《さよならあんころもち》を歌っていた。

(3) 楽器について

今回は、朝の会における表現活動は主に保育者のギター一つの伴奏によって進められていた。伴奏のギターの他の楽器は、保育者が持ってきたタンブリン一つに限られていた。

既製の楽器以外の手づくり楽器も今回は見られなかった。しかし、「草笛」に関する保育者と子どものやりとりがあったので、以下にまとめた。

場面1

男児A：「ねえ〇〇ちゃん(保育者の名前)、ぴゅーってやってー」(葉を手渡して)

保育者：「できるかなー、Aくんやってみてごらん」

男児A：「ふーっ」(口にくわえるが音はならず息で葉が飛んでいく)

保育者：「ふーっ」(保育者もわざとAくんのまねをして葉を飛ばす)

場面1では、男児Aが散歩中草を見つけ、草笛を鳴らしたく保育者に声をかけた場面である。鳴らしたいが思うように鳴らず、葉が吹き飛ぶだけであったが、失敗して葉が吹き飛ぶのが面白かったようで、保育者と笑いあっていた。音は鳴らなかったものの、葉を見つけて「草笛をしたい」と思いつくことができるのは、これまでの保育の中で保育者と草笛を鳴らした経験があったからだと考えられる。日常的に自然物を使って音を鳴らす活動を楽しんでいるようであった。

(4) 環境音について

今回のフィールドは、森林公園出合いの森という比較的山道も整備された環境ではあったが、整備されていないマップに載っていない場所も、子どもが行きたいと言えば躊躇なく進んでいた。よって、一般的な幼稚園・保育園の遠足などでは「危険だから行ってはいけない」と言って制限されてしまいそうな道なき道でさえ、保育者の目に見える範囲であれば歩くことができる。このような道なき道を進んでいると、草をかき分けて道を作るときのガサガサという音、踏みつぶして枝が折れる音、風に吹かれて木々や葉が揺れる音、雷や雨音がより身近に感じられた。「きょうは、かぜがビュービューいってるね」と環境音に気付く子どもの姿もあった。また、落ちている木や枝を振り回し、ビュンと風を切る音を楽しむ姿も見られた。このような姿から、子どもたちは、自然の音に耳を傾け、聞こえる音を楽しんでいるように見えた。「整備されていない道は危ないから」「木を振り回すのは危ないから」と子どもの行動を制限してしまうことは、子どもが自分自身で危険を判断する力だけでなく、新たな音環境に触れる機会さえも気づかぬうちに奪ってしまっているのかもしれない。

また、森の中を歩く際、子どもたちがそれぞれ背中に背負っているリュックに必ずついている熊鈴が一斉に鳴り響く音も、森のようちえんならではの印象的な音環境となっていた。

IV おわりに

これらの調査を通して、森のようちえんには、森などの恵まれた自然環境を生かした豊かな音楽表現活動が見られることが明らかになった。その特徴を大きく三つにまとめる。

一つには、ギターを用いた表現活動が挙げられる。一般的な園では、表現活動の際には、ピアノでの伴奏や、子どもの歌等の音源をCDプレーヤーで流すことが多い。しかし、鳥取県内の森のようちえんの多くが表現活動にはギターを用いていた。これは、屋外での保育を基本としているため、ピアノでの伴奏ができないこと、どんな環境であれ持ち運びやすく、メロディーも奏でることのできるギターが扱いやすいからだと言える。また、CDではできない、目の前の子どもに合わせてテンポや調を自在に変えながら弾くということが可能であることも一つの理由である。森のようちえんで表現活動を充実させるためには、ある程度ギターを弾くことのできる保育者は必要不可欠であるともいえる。

二つには、自然物を生かした表現活動が挙げられる。既製の楽器が十分存在していなくても、森にはたくさんの自然物があふれている。子どもたちは、そのような身の回りにある自然物、例えば竹や貝の中に木の実や石を詰めてマラカスを作っていたり、草を摘んで草笛を作ったりと手づくり楽器を作っていた。また、楽器として形作らなくても、木の板を枝でたたき音を楽しんだり、石を両手に持ち、合わせて鳴る音を楽しんだり、自然物に触れて出る音を楽しむ子どもの姿も見られることがわかった。表現活動の際には、子どもたちはこのようなオリジナルの楽器を取り出して、メロディーは奏でられなくても、曲のリズムに合わせて鳴らすことを楽しんでおり、子どもたちそれぞれが出す音が重なりあって既製の楽器だけでは聞くことのできない豊かな表現となっており、森のようちえんだからこそ見ることのできる表現活動といえる。

三つには、多様な音環境の受容と表現が挙げられる。雨や風の音など一見耳を澄ませばどこでも聞こえそうな音も、静かな森では一層身近に聞くことができる。また、危険だからといって遠ざけられがちな活動も森のようちえんではほとんど制限されないことで、火を起こして聞こえる火の音、整備されていない道なき道を進むことで聞こえる草をかき分ける音、枝が折れる音などの音環境にも触れることができる。そういった音を受容し、擬音語で表現したり、音を楽しんで自然物に繰り返し触れたりする子どもの姿も見られ、日常的に存在する多様な音環境に触れることのできる、豊かな感性を育むための環境が整っているともいえる。

このように、園舎が存在していなくても、十分な楽器や音源が存在していなくても、森のようちえんには、上の三つの特徴で挙げたような、独自の環境を生かした豊かな音楽表現活動の実態があるといえる。

今回行った質問紙調査では、回収率が低く、鳥取県内の森のようちえんの実態の全容を把握するには十分な情報が得られなかった。また、それぞれの園が保育活動を主に行うフィールド、環境についても問い、それにより異なる表現活動の音環境が見られていたかについても検討していく必要がある。

観察調査では、園を限定してしまったため、一通りの表現活動の流れしか考察することができなかった。また、観察の日数が少なく、子どもや保育者が行う表現活動、音環境について考察することも限られてしまった。ここから、園を限定せず、県内の広範囲の園への継続的な観察調査を通して考察していくことが課題であるといえる。また、観察調査で見られた以外の日常の保育における表現活動についての保育者への聞き取り調査をすることで、より深い考察ができたとも考えられる。

これらの課題を踏まえ、今後さらに研究を行い、明らかにしていきたい。

謝辞

本調査にご協力をいただきました、鳥取県内の森のようちえんの皆様、ならびに観察調査にもご協力いただきました、鳥取・森のようちえん「風りんりん」の皆様に、感謝申し上げます。

付記

本稿は、2017（平成 29）年度鳥取大学地域学部卒業論文「森のようちえんにおける音楽表現活動についての一考察」の第二章、第三章に基づいている。

本稿の一部は、日本音楽教育学会中国四国地区例会（2018年3月、於：就実大学）において口頭発表した。

引用および参考文献

¹ 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018年、p.209

² 森のようちえん全国ネットワーク Web サイト

<http://morinoyouchien.org/about-morinoyouchien>（2017年6月5日アクセス）

³ 今村光章『森のようちえん 自然のなかで子育てを』解放出版社、2011年、p.107

⁴ 文部科学省、前掲書、p.244

⁵ 作詞：天野蝶、作曲：一宮道子

⁶ 作詞：高すすむ、作曲：渡辺茂

⁷ 作詞・作曲不詳。『尋常小学唱歌（二）』（1912）